

2023 年度 イラン短期研修プログラム 報告書

東京外国語大学 言語文化学部
ペルシア語専攻 3年

I. はじめに

2024年2月に行われた本研修に参加し、テヘラン、エスファハーン、ヴァルザネ、カーションの4都市を訪れた。個人旅行では得ることのできない貴重な経験を沢山させていただき、実り多い11日間となった。

研修中に私が重視していたのは、多角的な視点で学び、イランという国をより多面的に捉えることである。これらを元に本報告書では、宗教・対外面・精神性の3つの視点に絞り所感を述べる。

II. 宗教的視点から

私自身、イランを訪れるのは今回が初めてではなく、2022年9月に1か月ほど滞在したことがあった。2022年9月といえば、イランで22歳の女性がヘジャブ(ヒジャブ)の不適切な着用を理由とした拘束中に亡くなる事件が起き、それを発端とした抗議デモが広がり出した時期である。「女性・命・自由」をスローガンに掲げたこのデモは世界各地に広がり、日本でも報道されていた。私は偶然にも、この騒動発生前後のイランを目にすることとなったのである。帰国後も様々なメディアを通してこの騒動の行く末を気にかけていたが、今回の研修で、あれから1年半が経とうとしている現在の様子を直に見ることができた。

一番大きな変化として感じたのは、ヘジャブを着けずに、或いは首に緩くかけただけの状態で街を歩く女性たちの姿である。その多くが若い人で、都市部であるテヘランで多く見られ、地方では少ない印象だった。全体的には依然マイノリティだが、1年半前とは明らかに異なる光景である。強化と緩和を繰り返してきた風紀警察による取り締まりも、現在はかなり緩和されていることが伺えた。

一方で、人々の中にイスラームが変わらず深く根付いていることも、幾度となく実感した。例えば、本研修の初日はイラン革命記念日であった。街の至る所に国旗やお祝いの垂れ幕が飾られていたが、人通りや車通りは極端に少なく閑散としていた。聞けば、このような記念日には家族などで集まって過ごすのが恒例だという。なお、その日はテヘランの空気がいつになく澄んでいたのだが、翌日からは打って変わって交通量が増え、排気ガスにより瞬く間にいつもの大気状況となった。

また、テヘランでイマームザーデ・サーレ(シーア派十二イマーム派第七代イマームの息子・サーレの霊廟)を訪れたときのことも印象に残っている。女性はチャードルを着用する必要があり、廟内は男女で完全に区画されているという、私のような異教徒にとってイスラームを強く感じられる場所である。参詣者が多く、その中に、煌びやかに囲われた棺の前で

泣き崩れる若い女性の姿があった。信仰心による涙かと思いかけたが、案内してくれた現地の女子学生から、悩みを打ち明けて泣いているのだと教えられた。彼女自身も、毎週この場所を訪れているという。これを聞き、日本における参拝と近いものがあると感じた。もちろんイスラームにおける参詣や祈りとは同一視され得ないものだが、純粋な心の拠り所としてのイスラームが、かつてなく身近に感じられた出来事であった。

III. 対外的視点から

研修中、イラン外務省付属の大学院大学(SIR)での講義や外務省への表敬訪問など、政治や外交について専門家から学ぶ機会が多くあった。ここでは、外務省アジア太平洋局局長から伺ったお話について報告したい。

主にお話いただいたのは、イランと中東の情勢や日本との関係、外交における考え方などの対外的な内容であり、イランの明確で強い意思を感じるものであった。顕著な例としては、中東情勢に関する話題で「我々が尊重すべきはパレスチナの決断であり、欧米のものではない」とはっきり述べられていたことが挙げられる。

日本に対しては好印象を抱かれているようで、話された内容からは、日本への期待というメッセージが受け取れた。具体的には、「ぜひ文化的な交流を図りたい」「互いにアップデートし合える関係でいたい」といったことのほか、「日本は真の情勢を理解する必要がある」「日本は米国なしでもアクターになれる」「日本は安っぽい関係ではなく価値のある関係に対して代価を払うべき」など、対米感情が透けて見えるような内容にも言及があった。

また、外交における考え方として、「隣国を自ら決めることはできない。そのため互いを理解し合い、関係構築の機会を作ることが必要である」「政治においてシャイな者は敗者である」といった言葉が述べられていた。このことから、イランの地理的・国際関係的な状況の難しさや、それ故に重要となる芯の強さを感じ取ることができる。

これらを受け、日本にまず求められることは、イランという国への偏りのない理解の促進であると感じた。

IV. 精神的視点から

訪問する先々で当たり前のように温かいお茶が出され、食事では本当に満腹になるまで大量の料理が振る舞われる。イラン人は本当に親切で、ホスピタリティに溢れている。エスファハーン州の都市カーシャーンで、カーシャーン・メフルという身体障害者支援団体を訪問した際、イラン人のこの温かい心をより強く感じた。

15年前に設立された当団体は寄付金で成り立っており、身体が不自由な方のリハビリと経済的自立を目的に、13~35歳の100名以上が、イランの伝統工芸品作りやカーシャーン市内の病院の作業着縫製など複数のコースから興味関心に合ったものを選び、5~6年かけて技術を身につけているそうである。このような有意義で充実した組織があること自体尊敬に値するのだが、それが人々からの寄付のみで成り立っていると知り、イスラームにおける

寄付精神に感服した。また、特にカーシャーンは古くから障害者支援が活発な地であることも知った。一方で、寄付金額が経済状況に左右されるものであるため資金が安定しないという課題も抱えており、今日は国外からも寄付を募っているという。来年からは五カ年計画を立て事業を進めていくと聞き、団体の発展を心から願うとともに、日本からもできることはないかと考えを巡らせた。

V. 終わりに

上述の3点は、研修を通して捉えたイランの姿のほんの一部である。新たな気づきと学びに満ちたこの上なく有意義な11日間を経て、イラン社会が宗教・政治・文化・歴史などの様々な要素が絡み合う複雑なものであることを再認識し、同時にイランの奥深さに更に惹き込まれた。研修での学びを活かし、日本人として、また日本として、今後イランとどう関わることができるかを主体的に考えながら、より広く深くこの国を知っていきたい。

最後に、このような貴重な機会を下さり、研修を支えてくださった全ての方に、心より感謝申し上げます。

(なお、本所感 は 執筆者 個人のものであり、笹川平和財団の見解を示すものでありません)